45 R.P.M.
——a Summer Song

鶴岡雄二

45回転の夏

新潮社

45回転の夏

鶴岡雄二

新潮社

45回転の夏

1994年7月20日発行

【著　者】 鶴岡雄二
【発行者】 佐藤亮一
【発行所】 株式会社新潮社
郵便番号162　東京都新宿区矢来町71　振替東京4-808
【電話】 営業部03-3266-5111　編集部03-3266-5411
【印刷所】 大日本印刷株式会社
【製本所】 株式会社大進堂
© Yuji Tsuruoka 1994, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-398301-9　C0093
価格はカバーに表示してあります。

45回転の夏

CONTENTS

[第1章]

ローラーコースター、1966年

5

[第2章]

メリーゴーラウンド、1967年

183

[第3章]

フルサークル、1991年

297

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装画……峰岸　達
装幀……新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

45回転の夏

［第1章］

ローラーコースター、1966年

I

すべては、そういうぐあいにはじまった馬鹿げているけれど、ほんとうなんだ

バス・ストップ

ホリーズ

高圧線の鉄塔が立つ山のむこうは、もう鎌倉市なのだが、県道の両側は横浜市の南端になる。

入寮の日、滝口慶一は、県道から入る校舎への坂道の途中で、畑をはさんだむこうにある、竹が生いしげった小高い丘の下から、煙が立ちのぼっているのを見た。

車を運転していた父親は、あれは炭焼きだな、と呆れたようにいった。

たしかに、海側を走る十六号線と、山側を走る一号線という二本の国道にはさまれた、あるいは、内陸を走る国鉄と、海沿いを走る私鉄にはさまれたこの一帯は、あまり人の住まないところで、低い山が折り重なり、そのあいだに複雑な谷間がひろがっている。

この地形をそのまま生かしたキャンパスの周囲には、人家は見えなかった。ゆるやかな山なみのあいだに、段丘につくられた畑が、わずかに顔をのぞかせているだけだ。

この新設の全寮制中学高等学校に入るのは、じぶんで決めたことなので、慶一は新しい生活をおそれてはいなかったが、ひとつだけ気がかりなことがあった。

四月二十九日にはじまる連休まで、まったく寮を出られない。今年になってはじまった、テレビの《ゴー

ゴー・フラバルー》や、《ハニーにおまかせ》を見られなくなることをのぞけば、寮から出られないこと自体は、それほど問題ではない。

いや、もちろん、《ワイルド・ウェスト》だって、《ナポレオン・ソロ》だって、《それ行けスマート》だって、今月からはじまる《バットマン》だって、気にならないわけではないが、テレビのことは考えても意味がないから、考えないことにした。

問題は、四月十五日に、ビートルズの新しいLPが発売されることだ。いまのところ、慶一の音楽的関心はこの一点に集中していた。

今年、ビートルズが日本にくる、というウワサもあるが、そちらのほうはあまり信じていなかった。ビーチボーイズやハーマンズ・ハーミッツはきても、ビートルズが日本なんかにくるわけがない。

レコード屋にいけるのは、四月二十八日の午後だろう。十三日も遅れるなんて、あんまりだ。昼食後に帰宅だから、一時に出て、車で家まで四〇分。レコード屋との往復に一〇分。どんなに早くても、『ラバー・ソウル』の一曲目を聴けるのは、四月二十八日午後一時五〇分だ。

小学校最後の一年、一九六五年から六六年の二月までは、慶一は勉強にいそがしかったはずだが、そんなことより、ノーキー・エドワーズとドン・ウィルスンが奏でるグリサンドや、姉さんがビートルズ・マニアだという同級生の女の子が貸してくれた、〈オール・マイ・ラヴィング〉の強力にドライヴする三連のリズム・ギター、そして、女の子たちもまじえて、小学校の同級生と横浜まで見にいった、ビートルズの二本の映画（つい半月ばかりまえに、西口の相鉄映画でやった「ビートルズ・フェスティバル」というのを、見にいったばかりだ）が記憶にのこっている。

クレイジー・キャッツは、『大冒険』をのぞけば低調で、東宝映画も《シャボン玉ホリデー》も、急速に慶一の関心の外へはじき出されていった。それどころか、一年まえには、ファンクラブに入るほど好きだったヴェンチャーズでさえ、もうあまり関心がなくなってきている。

プラモデルだって、自動的に潜水／浮上をくりかえす、サブマリン707のずんぐりしたモデルが最後だから、もう一年くらいなにも買っていない。小遣いはすべてレコードに吸いこまれてしまうのだから、しかたない。

しかし、寮ではロックンロールは聴けないだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父親は、寮事務室で入寮の手続きをすませ、慶一に、「じゃあ、お父さんはこれで帰る。入学式には、お母さんといっしょにくる。みなさんに迷惑をかけないようにな。しっかりやるんだぞ」

と声をかけ、部屋までいかずに、そのまま帰った。

大きなバッグと、買ってもらったばかりで、ほとんどなにも弾けないギターをもって、慶一はひとりで階段をあがった。

寮の部屋は八人単位で、慶一の入った二〇四号室は、ひとりをのぞいては、とくにつき合いにくそうな人間はいなかったし、塾で知りあった友だちがふたり、各自にわたされた部屋割表をたよりに、すぐに顔を見せにきたので、荷物をほどいて一時間後には緊張がとけた。

ただ、日が暮れかかり、六時一〇分まえに二階食堂に制服着用で集合、というアナウンスをきいたときには、さすがにさびしさを覚え、どうしてこんなところにきたのだろうと考えた。

食堂のドアのわきに、小さな黒板があり、薄葉紙の紅白の花で飾られていた。

最初の行には、四月三日という日付があり、「月」と「日」はペンキでかかれ、数字は白墨で書きこまれていた。そのあとには、これまた紅白の白墨で、こんな文字が記されていた。

入寮おめでとう！　厨房一同

入寮晩餐会メニュー

チキンコンソメ　アスパラガスのサラダ

マッシュポテト　ヒラメのソテ

コールドミート　パン

デザートはバニラアイスクリーム

慶一は、「厨房」という字を、とりあえず「とうぼう」と読み、コックかなんかの意味だろうと考えた。それより大問題は、メニューの中身だ。

ヒラメは嫌いではないが、ヒラメのソテーとはどういうものか、わからなかった。

その入寮祝賀の晩餐――それは開寮、開校の祝いでもあった――は、慶一の目には、ノリのきいたカラーに、慣れないネクタイを締めていることもあって、かなり堅苦しいものに感じられたが、この学校に対していだいていたイメージには合っていた。

あとから考えれば、逆に不思議に思えるのだが、さすがにワインはついていなかった。子ども用のシャン

ペンと称する、ただの甘い炭酸水をグラスに注いで、寮長の音頭で乾杯をした。
ここに集まった、一二四人の、たった一学年の生徒が、この新しい学校の全生徒だった。

「これって、いいジャムじゃん」
といいながら、慶一は、フランスパンのスライスと厚みがおなじになるほど、たっぷりとイチゴジャムをのせた。それは、ジャムパンに入っているような安いジャムではない。着色料の真っ赤な色ではなく、ちゃんと黒ずんだ赤だし、なにより、イチゴが原形をとどめているのが、その証拠だ。
朝の食堂は、採光のせいか、夜とはだいぶ雰囲気がちがう。
このあたりは南区と戸塚区の境界で、キャンパスの大部分は戸塚区側だが、食堂の途中から南区にはいり、慶一のテーブルはその南区側にある。へんな話だ。
「その、〝じゃん〟て、いったい、なんなんだよ」
と、ジャムのビンをとりながら秋本がいった。
「ジャムはジャムじゃん」
「ジャムじゃなくて、〝じゃん〟ていうのは、どういう意味かって、きいてんだよ」
慶一はわけがわからず、なにかいいがかりをつけて、ケンカを売っているのかな、と考えた。こいつは、はじめから態度がでかい。
「おまえ、なにいってんだよ」
となりの大森が、パンをふたつにちぎりながらいう。
「なんで、話の最後にじゃんをつけるんだよ」
大森と慶一は顔を見あわせた。
「じゃんはじゃんじゃん」
といってから、慶一は、なんだこれは、と自分のことばの意味と文法を再検討し、なにかべつのいい方はないものかと、必死で頭を回転させた。
「だからさ、じゃんていうのは、つまり、カッコいいじゃんとか、やるじゃんとかって……」
慶一はあきらめて、パンをほおばった。
「札幌じゃ、じゃんていわないのかよ」
と、大森がタマゴの頭をスプーンで叩いた。秋本のうちは札幌だそうだ。
「それって、半熟？」
慶一と半熟タマゴは、不倶戴天の仲だ。
「あたりまえだろ。だからこれにのってんじゃん」
と、大森が台をスプーンで叩いた。
「じゃ、おれのあげるよ」

やはり、なにもかもがうまくいくわけはない。タマゴぐらいなくても、生きていける。
「おれんとこじゃ、いわないよ。だから、きいてんだろうに」
「あっ、そういうときに、きいてんじゃんよ、て使うんだ」
「ああ、そうだ。なんとかじゃない、ていう意味だ」
「なら、じゃない、ていえばいいだろ」
「いいんだよ。このへんじゃ、みんな、じゃんていうんだってば」
「方言か」
「方言てことはねえだろ。田舎じゃあるまいし」
天辺の殻をどけながら、大森が不愉快そうにいった。
「田舎だろ、ここは」
と、秋本が裏山を見かえる。
「そうじゃなくて、横浜とか、鎌倉とか逗子とか、このへん一帯では、そういうんだよ」
「藤沢も、茅ヶ崎も、平塚も、小田原もいうよ」
箱根の山のむこうは知らない。いずれにしても、山のむこうは化物のすみかだ。すくなくとも、浅草生まれの慶一の祖母は、つねづねそう主張している。
「田舎だろ。これでも、横浜市なんだろ」
「わかった、わかった。田舎だ、ここは。頭おかしくなりそうだ」

寮の生活は、ある意味で、きわめて複雑だ。
制服ひとつとっても、金糸のエンブレムがついた紺のブレザー、レジメンタル・タイ、グレイのスラックス、というフォーマルなもの、そして、ふだん学校や寮で着る、衿なし上着にオープンシャツの校服、という二種類があり、いろいろ行事のある入寮入学前後は指示が複雑で、新入生を悩ませた。
だれかが知っているはずだ、という考えはケガのもとだ。じっさい、入寮二日目の夕食では、前夜の晩餐会であすからは夕食も校服着用のこと、といわれていたにもかかわらず、八人全員がネクタイを締めてあらわれた部屋が、ふたつもあった。
ひと部屋のほうは、あわてて着替えにもどり、コック長がベルを鳴らす正六時にまにあわなかった。もうひと部屋は、めんどうくさいといって、そのまま着席した。
寮長は、食事は全員きちんとするまで遅らせる、と宣言し、そのまま着席した部屋は着替えにもどされた。
そろったところで、そのふた部屋の全員が起立させ

られ、寮長に面罵(めんば)された。きみらのようなトンマは、この寮では生き残れないだろう、と。

その夜のメインディッシュはグラタンだった。慶一は、グラタンは好きだが、冷えかかったグラタンは好きじゃないな、と考えた。

「でもよ、いくらなんでも、きのうとちがいすぎるんじゃない。月曜だから平日メニューかよ」

秋本が口をとがらせた。

「いいじゃねえか。こんなもんだろ」

うるさそうに大森がこたえる。スプーンから、盛りすぎたグラタンが崩れて落ちた。

たしかに、「平日メニュー」だった。飲み物も日本茶だ。グラスでお茶が飲みたいわけではないが、プラスティックのコップはないだろう、と慶一は、その白地に銀の幾何学模様が入った、厚手で、口のひろいコップをながめた。おそろしく据わりがよさそうな、いかにも実用的な趣きに、慶一はいらだった。

もう、お客様あつかいは終わりだ。

ひと部屋八人に対し、シャワーがひとつ、トイレがひとつ、という数字をどう考えるだろうか。

寮生にとって、これは明白な数字だった。

シャワーはいい。入浴時間は夕方五時から六時の夕食まえまで、そして、六時半から七時まであるし、シャワーだけでなく、本棟一階には大浴場と小浴場があり、いちどに四十人くらい入っても大丈夫なので、この面で不自由はない。

なにしろ、まだ、一二四人しかいない。過密が問題になるのは、遠い未来の話。

問題はトイレだ。

朝食後から登校までの三〇分は、いつも戦争になる。

まだ、ようすのわからない入寮最初の朝、食堂からぞろぞろと、八人そろって部屋に帰ったところ、いちばんさきにドアをくぐった大森が、

「イチバーン」といって、洗面所に入った。

二番目にドアをくぐった慶一のうしろから、秋本が、

「あ、ちきしょう、おれ、二番」

といったとき、はじめて、慶一はなにをいっているのかが理解できた。

この秩序は最初の朝に確立され、くずれることはなかった。くずしようがないのだ。二学期の編成替えで慶一が入った一〇二号もおなじで、要するに、これは寮中どこでも通用する、グローバルなルールだった。

四月五日の朝食後、塾の友人とホールで立ち話をし

ていたために、慶一はトイレの順番が最後になってしまった。二日もつづけて、おなじ間違いを犯すようでは、「この寮では生き残れない」かもしれない。

本棟には、中央階段とはべつに、非常階段があり、その階段室のわきにはトイレがあった。それに思いあたったことは、慶一がこの寮に適応しつつある、最初の徴候といえた。

しかし、防火扉をあけて、二階の非常口へいくと、階段を昇りかけていた奴が立ちどまり、

「おまえもトイレならいっておくけど、そこはもうふさがってるぞ」といった。

慶一は、じゃ、三階だ、と考えたが、じぶんよりふたつ三つ年上に見える、一五五センチぐらいはありそうなそいつが、すでに階段を昇りかけているのは、三階にいくためなのに気がつき、あきらめて、きびすを返した。

四階にもトイレはあるが、なんだか、ばかばかしくなってきた。これは、それほど独創的なアイディアではなかったらしい。

「おい、おまえ、急いでるのか」

と、慶一の背中に声が浴びせられた。

態度のでかい奴だな、「おい、おまえ」はないだろう、とは思ったが、無視する理由もないので、慶一は立ちどまってふりかえった。

「急いでるんなら、いっしょにこいよ」

そいつは軽くアゴをしゃくった。

慶一は、なんだかよくわからなかったが、あとにつづいて階段を昇った。

見知らぬ新入生は、三階をとおりすぎて、四階へいこうとするので、慶一は、

「どこへいくの」と問いただした。

「四階だ。どこへいくと思ってんだよ」

そういわれると、そうだ。四階の上には屋上しかないし、非常階段は屋上まではつながっていない。

でも、四階には空き部屋と娯楽室があるだけだ。娯楽室は夕方まで閉まっているはずだし、空き部屋には立ち入るなと、晩餐会後におこなわれた、寮生活のオリエンテイションで注意を受けた。

「おれ、浅井ってんだ。三〇四号室」

さきをいく奴が、ふりむかずにいった。

「ぼくは滝口」

部屋番号をいおうとすると、浅井が押しとどめた。

「二〇四だろ、知ってるよ」

と、はじめて笑みをもらした。

それは、この図々しそうな奴にはまったく似つかわしくない、人なつっこくて、どこか羞みをふくんだ、やさしい笑顔だった。

四階の非常口のトイレにいくのだとばかり思っていた慶一は、浅井が中央ホールにはむかわず、逆にヴェランダへむかったので、思わず、

「どこへいくんだよ」

ときいてから、しまった、と思った。

「ヴェランダだよ。見りゃあ、わかるだろ」

非常口ホールからヴェランダへ出ると、この寮を建てるためにけずられた裏山の、半分だけになった頂上が見え、むきだしの急斜面で、関東ローム層の成立ちを観察できる。

浅井は右に曲がり、四〇一号のヴェランダにいく。この寮は円筒形で……いや、それは不正確だ。こういえば、わかってもらえるかもしれない。

ナットというのは、その外周が六角形で、内周は円になっているが、ここに外周が十六角形のナットがあると仮定しよう。このナットの外径は二〇ミリ、内径は五ミリほどとする。

まず、五円玉を一枚おく。これは直径二二ミリだ。その五円玉と中心を一致させて、ナットを上にのせる。このナットの上にまた五円玉を重ねる。これが四層になるまでくりかえして、最後に五円玉をもうひとつ、ふたのようにかぶせ、さらに平たい頭痛薬を一粒その上にのせると、できあがりだ。寮の本棟はだいたい、こんな形状といえる。

五円玉の、ナットの外にはみだした部分がヴェランダ、内径のほうにはみだした部分が、中央階段の周囲をめぐっている廊下になる。天辺の五円玉は屋上で、その上にのせた平たい錠剤は、屋上への出口だ。

ふたりはいま、その円周と、十六角形の一辺とのあいだにいる。

浅井は、四〇一号のアルミサッシュの窓枠に両手をかけて、上下に揺すりはじめた。慶一の頭のなかで警戒警報が鳴る。

「なにしてんだよー」

返事がくるまえに、カギがはずれ、窓が開いた。あまりの呆気なさにおどろいたのは、慶一だけではなく、浅井もおなじのようだった。

「見りゃ、わかるだろうが」

浅井は開いた窓から手を入れ、ヴェランダと室内をつなぐドアのノブをむこう側からつかみ、ドアをあけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com